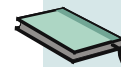


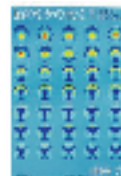
この本と私



「脳の中の水分子

意識が創られるとき」

中田 力著



紀伊國屋書店

この本の事を新聞の広告で知った時に、まず「上手いタイトルをつけたなあ」と思いました。「脳」と「水」という、現在「ブーム」であるキーワードをつなげ、さらに「分子」という言葉を使う事でアカデミックな印象を持たせています。

本書は、原子の構造や確率論などの科学の基礎理論を用い「脳のなりたち」の最新理論（ただし、学説としては異端である）をわかりやすく解説しています。著者の論理展開の底流には「世界は自己相似（フラクタル）構造である」との原則があるのか、ミクロの現象、マクロの現象と脳のなりたちを対比させており、一見複雑に見える脳の構造を直感的に理解しやすく説明しています。

特に、表紙にも使われている、水中の熱の動きに沿って脳が自らそのカタチを作っていくというシミュレーションは、とても美しく、著者の理論の説得力に厚みを持たせています。ただし、そうやってできた脳のカタチから意識が生まれていくプロセスについては、展開が唐突過ぎ、もう少し補足する説明が欲しいところ。

脳と体全体とが同芯の球体のような関係にあることが理解できる一冊です。

宇響